

# 日本語教室との協働

## —地域とともに歩むために—

浜松科学館 横田 誓子 島田 真帆

### 1. はじめに

「博物館は地方公共団体、学校、社会教育施設その他の関係機関及び民間団体と相互に連携を図りながら協力し、当該博物館が所在する地域における教育、学術及び文化の振興、文化観光、その他の活動①の推進を図り、もつて地域の活力の向上②に寄与するよう努めるものとする。」（下線・番号：筆者）

これは、令和5（2023）年4月1日に施行された改正博物館法の第3条第3項に書かれた文言である。特に下線部①②については、令和4年4月15日に文化庁より通知された「博物館法の一部を改正する法律の公布について」の留意事項6、7に、次のように説明されている。

「①「その他の活動」には、まちづくり、福祉分野における取組、地元の産業の振興、国際交流等の多様な活動を含み、②「地域の活力の向上」については、地域のまちづくりや産業の活性化に加え、コミュニティの衰退や孤立化等の社会包摂に係る課題、人口減少・過疎化・高齢化、環境問題等の地域が抱える様々な課題を解決することを含むこと。」

これにより博物館施設が、地域のさまざまな課題に向き合うことが努力義務となった。

当館は、2024年10月に改正博物館法のもと、登録博物館として認定を受けた。今後、地域博物館として「地域」と向き合い、その機能をもってどのように役割を果たしていくのか。2024年度に取り組んだ、日本語教室（浜松国際交流協会）との協働について報告するとともに、地域博物館の役割について、改めて考える。

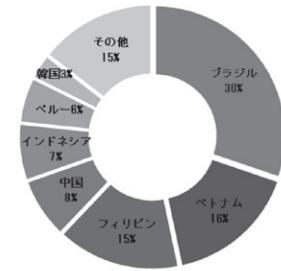
### 2. 背景

浜松市には2025年11月1日現在、89か国31,116人（浜松市総人口779,295人のうち3.9%）の外国人住民がいる（註1）。世界的な金融危機「リーマンショック」が起こった2008（平成20）年の33,326人をピークに、一時は20,000人まで減少したが、2024年の11月には、再び30,000人を超えた。浜松市の特徴としては、永住・定住者が約7割を占めることや、ブ

ラジル人住民の数が全国で最も多いことである。

浜松市は、国際化施策の指針として 2001 年度（平成 13 年度）「浜松市世界都市化ビジョン」を策定（2007 年度改訂）し、「共生」「交流・協力」「発信」の各分野での施策を推進。特に「共生」分野については、公益財団法人浜松国際交流協会（以下浜松国際交流協会）が運営する「浜松市多文化共生センター」（2008 年に浜松市国際交流センターから名称変更）と「浜松市外国人学習支援センター（U-ToC）」（2010 年開設）を両輪としながら、日本人市民と外国人市民の共生に向けた生活基盤支援や日本語学習支援等を進めてきた。その後、急速なグローバル化、世界的な金融危機（2008 年）、東日本大震災の発災（2011 年）など、市民を取り巻く環境が不安定さを増す中、浜松市は日本人・外国人を問わず、誰もが安心して暮らせる地域社会を築くため、2013 年に浜松型の多文化共生社会の実現を目指して「浜松市多文化共生都市ビジョン」を策定し、外国人市民を「まちづくりを進める重要なパートナー」と捉え、施策を展開している（現在第 3 次ビジョン：2023 年度～2027 年度）。特に第 3 次ビジョンでは、第 2 次ビジョンの成果や課題をもとに、「浜松市在住の外国人市民の特徴を踏まえた日本語学習支援体制の強化・充実」が、今後重視する取り組みの方向性の 1 つに掲げられている。（註 2）

国籍	人数
ブラジル	9,417
ベトナム	5,120
フィリピン	4,769
中国	2,351
インドネシア	2,206
ペルー	1,762
韓国	976
その他	4,515
合計	31,116



（資料 1 浜松国際交流協会公開資料より筆者作成）

## 2. 浜松科学館と多文化共生

当館は 1986 年に、浜松駅にほど近い街中にある科学館として設立され、市民に科学の学びを提供してきた。2019 年に全面リニューアルオープンし、東京に本社を置く株式会社乃村工藝社と、地元企業である株式会社 SBS プロモーションの共同事業体が指定管理者として運営を開始した。リニューアルオープン当時、浜松市が外国人市民の集住する都市として、「多文化共生都市」を掲げ、その施策を進めていることを知っている職員はほとんどいなかったらと思う。リニューアルオープンからの数年間、浜松市の社会教育施設であり公共施設でもある当館で、外国人市民を念頭に置いた施設運営や事業を行ってきたとは言いがたい。そんな中、窓口業務やチケットの場で、さまざまな来館者と最初に出会うアテンダントチームの職員から、「やさしい日本語」の研修を受けたいという要望があった。「やさしい日本語」は、在住外国人への情報伝達の手段として、1995 年の阪神・淡路大震災以降普及してきた、いわゆる社会運動である。高齢の方から幼児まで、さまざまな人が訪れる施設での情報の伝え方に、「やさしい日本語」が有効ではないかと考え、浜松国際交流協会に研修を依頼し、2023 年 12 月にアテンダントチームを中心に実施、その後、2024 年 4 月には、職員全員で研修を受けた。私たちは研修を受けて初めて、浜松市に在住する多くの外国人市民の存在を認識し、なぜ「多文化共生」の推進が必要なのかを知る機会をもった。

### 3. 日本語教室の開講と協働

当館を会場に次世代の子ども・若者を対象にした「日本語教室」の開講が決まったのは、「やさしい日本語」の研修から1年後のことである。浜松国際交流協会から、子どもたちの日本語の学びの場として、浜松科学館で日本語教室を実施したいとの希望をいただき、会場を提供する形で、2024年5月、「次世代のための日本語教室」（註3）が開講された。「次世代のための日本語教室」では、①外国人学校の生徒対象の「課外放課後日本語教室」、②公立小中学校の児童・生徒対象の「放課後日本語補習教室」2つの教室が実施され、ブラジル、ペルー、ベトナム、中国、インド等につながりをもつ子どもたちが5月から3月まで、科学館に通うことになった。当館は、市内日本語教室の拠点の1つとして会場として場を提供するとともに、②の「放課後日本語補習教室」に通う外国につながりを持つ小・中学生を対象にした事業（イベント）を、夏と冬に実施する形で協力した。

#### 1) 夏のイベント「オノマトペでシャボン玉」

オノマトペ（擬音語・擬態語）は、音やものごとの様子を豊かに表現する日本語ではあるが、外国につながりをもつ人たちにとっては伝わりづらく、習得が困難な言葉であるといわれている。（註4）しかし、科学館では、科学的な現象や様子を伝える時、「ピカピカ光る」「磨くとすべすべになる」「水滴がぽとぽと落ちる」など、多くのオノマトペを使って表現している。サイエンスショーの演目の1つである「シャボン玉」でも、日ごろから



サイエンスショーの様子

多様なオノマトペを使っていることから、ショー自体の楽しさと、オノマトペの響きのおもしろさが結びつくことで、日常生活でもオノマトペを使いたくなるようなショーを目指して、日本語教師と科学館職員が、一緒にショーを行った。日本語教室の生徒たちだけでなく、一般の来館者もともに楽しめる空間をつくり、ショーを観覧した他の職員から、「サイエンスコミュニケーションにおけるオノマトペの有効性について気づきがあった」との感想もあり、あらためて科学と言葉について考える機会となった。

実施日：2024年9月16日（月・祝）

担当者：上野（チーフエデュケーター）

参加者：日本語教室の児童・生徒7人、家族・友人14人（計21人）

一般来館者

## 2) 冬のイベント「やさしい日本語でプラネタリウム」

「やさしい日本語」でのプラネタリウムは、日本語教室関係者の皆さんから、強い要望をいただいていたイベントである。当館では、毎日、星空解説をライブ（生解説）で行っているが、これまで「やさしい日本語」での解説を行ったことはほとんどなかった。今回、「やさしい日本語」で星空解説を行うにあたり、2つの目的を設定した。1つ目は、日本語教室に通う子どもたちに天文にかかわる日本語を学んでもらうとともに星空に興味をもってもらうこと、2つ目は、この投映を多文化共生や「やさしい日本語」に興味のある方、日頃プラネタリウム観覧に何らかの障害のある方に、観覧していただいたり、知っていただいたりする機会とすることである。そのため、投映担当者だけでなく、広報担当の職員も企画から入り、チラシ作りや広報の仕方について、ともに検討した。

### ■ 日本語教室での事前学習

投映を担当した職員は、日本語教室で実施する事前学習にも参加した。日本語教室では、科学館との連携事業（イベント）の際、必ず、日本語（特に学習用語）について、事前学習を実施して下さった。今回の事前学習では、前半で日本語教師が天文に関する言葉の学習や、自分の星座を紹介し合う時間を設け、後半では投映担当者が、オリオン座の星並びを自由につなげて、自分だけの星座を作るワークショップ「オリオン座のかたち、何に見える？」を実施した。浜松国際交流協会と科学館が、それぞれの専門性を生かしながら一緒に授業を行うことで、日本語の学習と科学の学びを楽しむとともに、プラネタリウム観覧への興味につなげられるようにした。



日本語教室での事前学習の様子

### ■ 「やさしい日本語」への変換

「やさしい日本語」への変換は、浜松国際交流協会職員である日本語教室担当者にご協力いただいた。変換後の解説文を見たとき、私たちは日頃、いかに「難しい」言葉を多用しているか、そして言葉が「多すぎる」か、あるいは「足りないか」を知ることができた。科学館では、科学に関するさまざまな情報や知識を、利用者とのコミュニケーションを大切にしながら、実験や展示体験を通して「言葉」を使って伝えている。情報を正確かつ迅速に「伝える」「伝わる」ことに主眼を置いた「やさしい日本語」は、原理を説明するには難しさがあっても、対象に応じて大いに活用できるコミュニケーション手段である。しかし、プラネタリウムの解説において、修飾する言葉をできるだけ減らし、短く、はっきりと表現する「やさしい日本語」で行うことは、投映担当職員にとって難しさがあったと思うが、情報の取捨選択について考える、よい機会となった。浜松国際交流協会の担当者と投映担当者との「や

「やさしい日本語」に変換するまでのプロセスは、正解のない「やさしい日本語」というコミュニケーション手段を、科学館として、どのように事業や運営に生かしていくかを示唆していただいたように思う。科学館職員だけでは実践することが難しかった作業にご協力いただいたことに、心から感謝するとともに、この連携による成果を、今後、地域や市民に還元していくことで、地域博物館として多文化共生の社会づくりに貢献していきたい。



「やさしい日本語」の解説文の確認作業の様子

実施日：2025年1月13日（月・祝）

17:00～18:00 ※特別投映（無料）

投映担当：島田（天文チーム）

参加者：77人

（内訳）

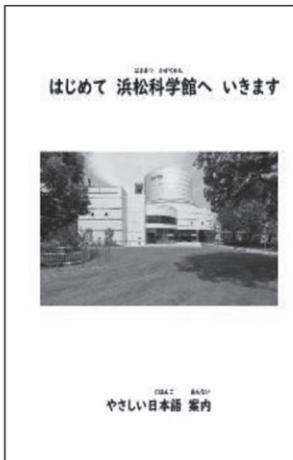
- ・日本語教室生徒・家族及び関係者 20人
- ・一般申込 57人（外国人市民、市内文化施設、福祉施設関係者、日本語ボランティア、科学館ボランティア、外国人学校生徒と教員など）

## 4. おわりに

博物館の定義はいくつかあり、代表的なものは、「博物館法」「ICOM（アイコム・国際博物館会議）」「UNESCO（ユネスコ・国際連合教育科学文化機関）」において、明記されている。しかし、博物館がその定義のもと、持続して存在するために重要なことは何だろうか。Museum Studies JAPAN「博物館の連携とは何か — ネットワーク・協働・共助が支える持続可能な経営モデル」の中で、以下のように書かれている。

「専門性・人材・空間・情報といったリソースを相互に補完し合い、共に成長していく関係性は、博物館という組織が単独で成り立つのではなく、つながりのなかで持続する存在であることを示している。」

2022年、2023年に「やさしい日本語」研修を行った後、多文化共生の推進に関して何をしたらいいのか分からなかった私たちは、今回、浜松市の多文化共生事業を行う浜松国際交流協会と連携できたことで、科学館単独ではなし得なかった事業を展開することができた。私たち職員にとっては、「地域の特徴」である多文化共生について学びを得るとともに、地域博物館として、これまで対象としてこなかった外国人住民へのアプローチを試みることができたことは、大きな一歩であると思う。また、日本語教室の事業とは別に、ボランティア研修で「やさしい日本語」を学んだ当館のジュニアボランティア（中学生・高校生）とともに、「やさしい日本語」案内の制作にチャレンジしたことや、市内外国人学校へ出張プログラムで出かけたことは、浜松国際交流協会との連携によって、背中を押していただき、実施できたと思っている。



浜松科学館バリアフリー情報



市内外国人学校での出張プログラム

市内には、博物館、図書館等の社会教育施設だけでなく、文化施設や大学もある。そして、それらはすべて地域の文化資源であり、市民、住民に活用されることで、支えられ、成長し、存続できる。地域の文化を担うそれら施設と地域課題・特徴を共有し、その解決や発展のために資源（専門性など）を生かし合いながら地域に貢献していく道筋を、ともに考えていけたらと思う。

### 参考資料等

- 註 1) H A M A P O 「はままつ多文化共生・国際交流ポータルサイト」浜松国際交流協会  
<https://www.hi-hice.jp/ja/>
- 註 2) 浜松市多文化共生都市ビジョン  
<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kokusai/kokusai/kokusaitoppage.html>
- 註 3) 「次世代のための日本語教室」  
「浜松市地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」を公益財団法人浜松国際交流協会が受託し、2024 年度から開講された次世代の子どもや若者を対象にした事業。
- 註 4) 「日本語学習者によるオノマトペ習得についての 探索的研究」谷口ジョイ、桑原大輔  
静岡大学言語学研究会、2024